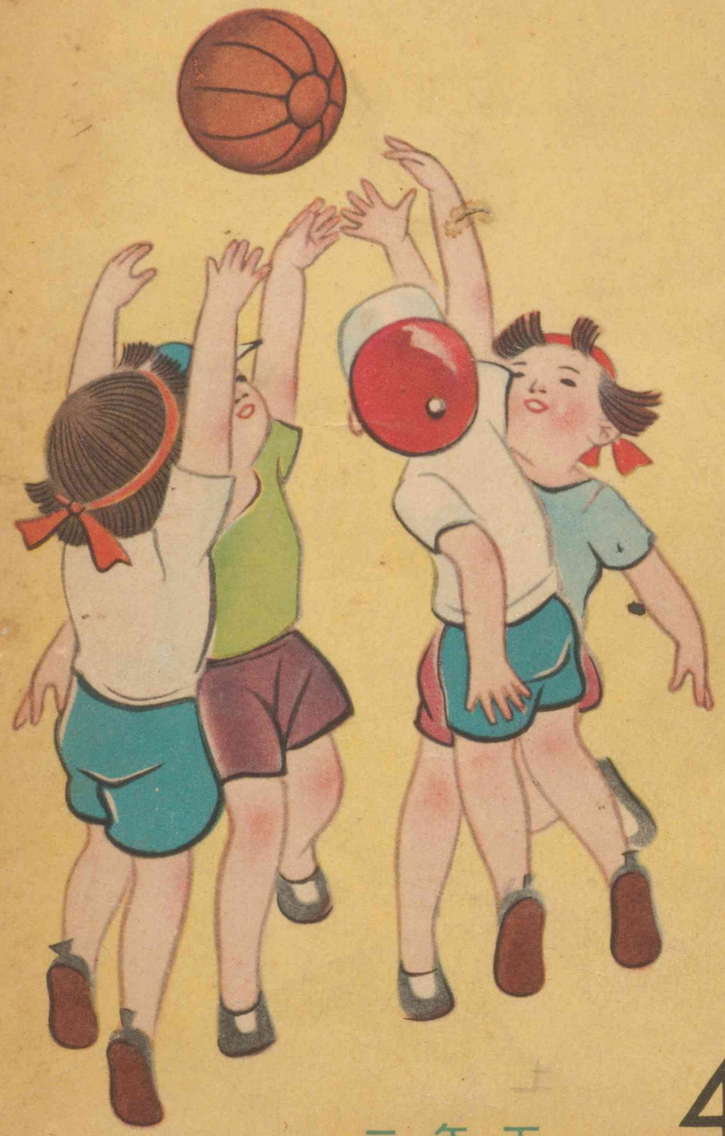
12
二葉
小国 214

# こくごの本

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編



4

二年下

60410
教科書文庫
6
810
34-1950
20000
89458

教科書文庫
6
810
34-1950
2000089458

THE PRIVATE ACADEMY OF SCHOLA LINGUAE

3

第二学年 下

# こくごの本

四

昭和二十四年十月十日
文部省検定済
小学校国語科用

広島大学図書
2000089458

広島大学
教
89458
図書

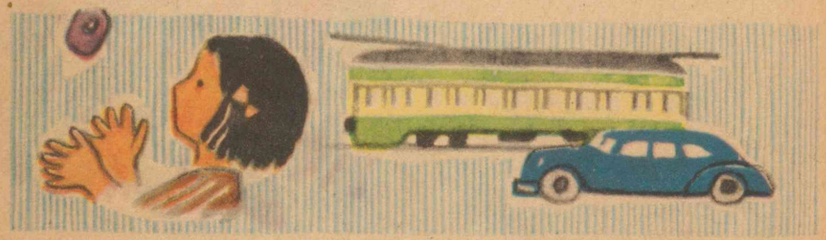
教育学科
資料室

3a
810
BB26

もくろく


一　空が　高い……(4)
二　ぼくの　日記……(8)
三　でんしゃごっこ……(16)
四　うちの　畑……(26)
五　赤ずきん……(33)
六　おつかい……(53)
七　ラジオごっこ……(62)
八　雪うさぎ……(76)
九　へやの　中で……(84)

十　(一)　ついの　ことば……(84)
　　(二)　かさねことば……(85)
　　(三)　いいまわし……(87)
　　(四)　きおくあそび……(89)
　　たろうさんへ……(96)
十一　むかし話……(108)
　　(一)　うらしまたろう……(108)
　　(二)　はごろも……(113)
十二　ししの　なさけ……(120)
　　おけいこの　手びき……(132)
　　あたらしく　でた　おもな　ことば……(134)
　　かんじ……(136)

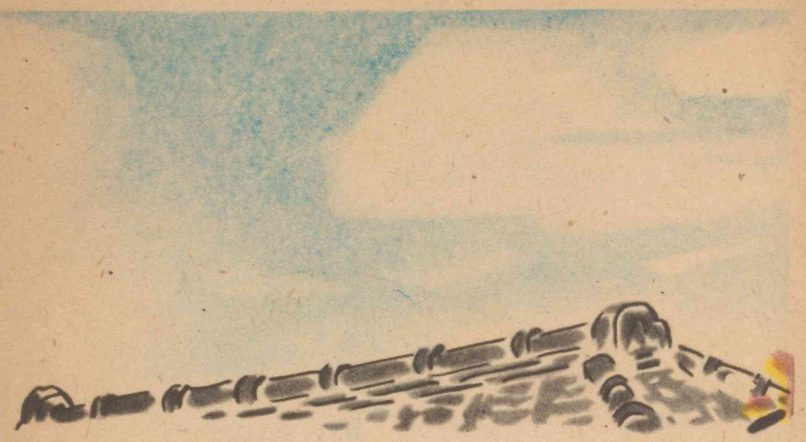



一　空が　高い

せのびを　しても、

空が　高い。





やねの　ま上に、

雲が　ういて　いる。

てつどうそうの

花が　ゆれて　いる。

からからと、

草の　みが　なる。

ピンと　とぶ、

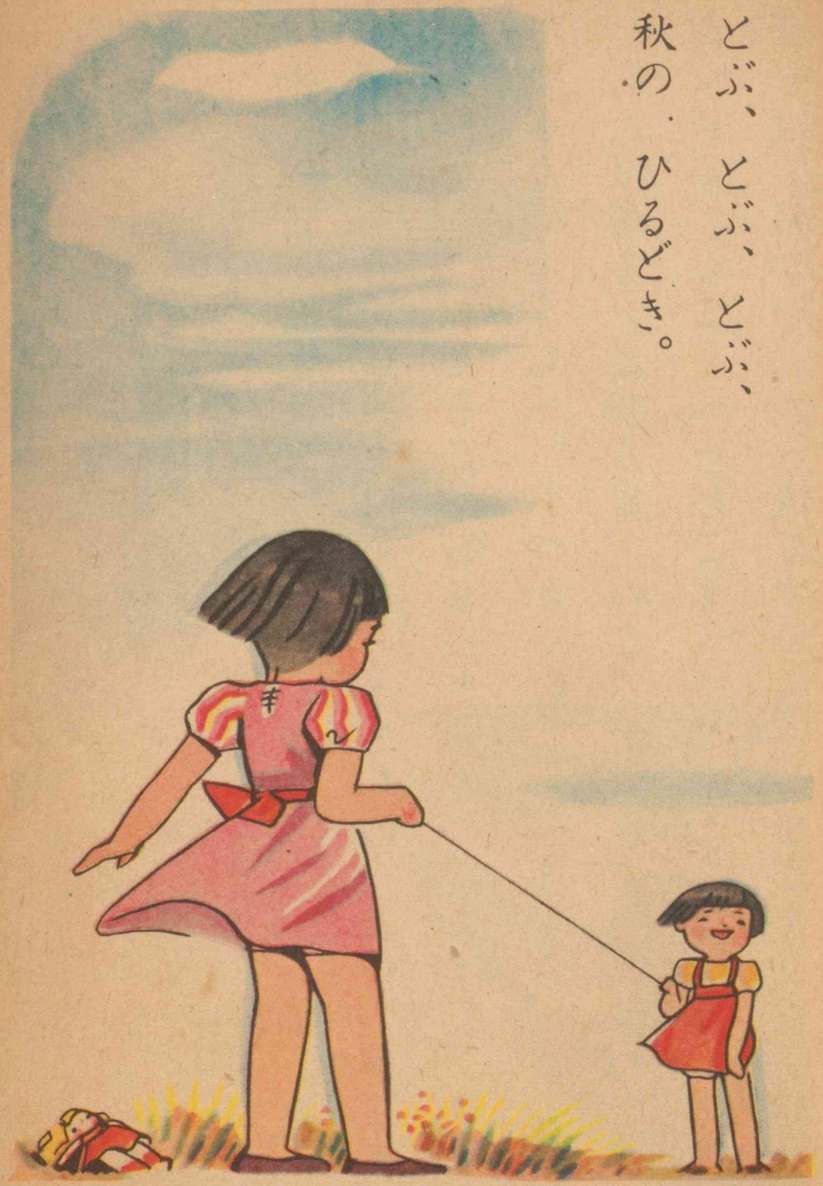
いなご、いなごだ。

秋風の
においが　はしる。

ひろい　にわ、
あそぶ　かお、かお、かお。
どの　かおも、
光が　いっぱい。

せたけほど、
高い　ゴムなわ。

とぶ、とぶ、とぶ、
秋の　ひるどき。



## 二　ぼくの　日記

十月八日　金よう日　はれ

どこまでも　空が　はれて、きもちの　よい　日です。

学校から　かえると、おじいさんの　ごようで、うえ木やさんの　うちへ　おつかいに　いきました。

たんぼ道を　とおると、いなごが　うすい　はねを光らせて、むこうへ　むこうへと　とんで　いきました。

ぼくは　おつかいの　道ですから、いなごを　おっかけたり　しないで、大またに早く　あるいて　いきました。

うちへ　かえると、おじいさんが、

「ほう、きょうの　おつかいは、なかなか　早かったね。」

と　いって、ほめて　くださいました。

十月九日　土よう日　はれ

うんどうかいの　れんしゅうを　しました。

リレーの　とき、ぼくの　組の　ひろしさんが　ころんで、一ばん　びりに　なりました。

ぼくは　いっしょうけんめい　かけましたが、やっぱり　ひとりも　ぬけないで　ざんねんでした。

そのかわり、百メートルきょうそうでは、ぼくは　一とうになりました。



うんどうかいは　十五日ですから、もう、あと　一しゅうかんです。早く　くると　いいなあと　思いました。

十月十日　日よう日　はれ

いつものように、早おきを　しました。

ねえさんと　ふたりで、へやの　そうじを　すませてから、つくえを　ならべて　べんきょうを　しました。

ちょうど　べんきょうが　おわった　ところへ、おかあさんが　赤ちゃんを　つれて　きて、

「おひるまで　おもり　して　ちょうだい。」

と　おっしゃいましたので、お
もちゃを　だして、えんがわで
あそばせました。
ひるからは、しげるさんの
うちへ　あそびに　いきました。

十月十一日　月よう日　はれ
東京の　おじさんから　こづ
つみが　とどきました。
ひらいて　みると、中から　ぼくの　うんどうぐつが

でて　きました。まっ白で　かるそうな、うんどうぐつ
です。よく　走れそうです。ぼく
は　うれしくて　たまりません。
もう　すぐ　うんどうかいです
から、それまで、おかあさんに
しまって　おいて　いただく
ことに　しました。
夜、さっそく　お礼の
手紙を　書きました。

十月十二日　火よう日　くもり　のち　はれ

おさらいが　すんだ　ところへ、しげるさんたちが　あそびに　きましたので、にわで　かくれんぼを　しました。

ぼくが、たきぎごやの　すみに　小さく　なって　いると、しげるさんが、ぼくが　いるのに　気が　つかずに、かくれに　きました。

「いるんだよ、いるんだよ。」

と、小さい　声で　いっても、まだ　気が　つかないで、とうとう、ぼくの　いる　ところまで　きて、



「あ、いたの。」

と、大きな　声で　いいました。

「きこえるよ。」

と、ぼくは　あわてて　いいました。

ふたりは　かさ　なりあって、じっと　がまん　して　いました。まるで　ふかい　海の　そこに、しずんで　いるようでした。

おしまいまで　みつかりませんでした。

## 三　でんしゃごっこ

「でんしゃごっこを　しよ"
うよ。」
うんどうじょうで　あき"
らさんが　いうと、みんな
さんせいして、すぐ　用意"
を　しました。

うんどうじょうの　まわりに　すじを　ひいて、レー"
ルに　しました。
えきも　つくりました。
「すな山」、「やくばまえ」、「学校まえ」、「ふもと」、「ゆうび"
んきょくまえ」、「大通り」、「いけのはた」など、えきの　名"
も　みんなで　考えて　つけました。
「ふもと」からは、「のうえんゆき」が　でるようにし、
「大通り」からは、「みなとゆき」と「こうえんゆき」が
わかれて　でるように　きめました。
「ピリ、ピリ、ピリ、うごきます。『いけのはたゆき』です。

お早く　ねがいます。

チン、チン、チン。」

しゃしょうさんは　しげるさんです。

「いけのはたゆき」と　書いた　ふだを

手に　もって　いいました。

うんてんしゅは　あきらさんです。

にこにこして　まって　います。

おきゃくさんが、たくさん　のりこ"

みました。

とうばんで、ちりとりと　バケツを



さげた　てるおさんは、おくれて　か"

けて　きて、やっと　まに　あいまし"

た。

「とびのりは　きけんです。」

と、しげるさんが　にこにこして　ちゅ"

ういしました。

「おにもつが　おおいようです。もっ"

て　あげましょう。」

早く　のって　いた、よし子さん"

が　いいました。

「ありがとう。」

と いって、てるおさんは、バケツを もって もらいました。

「うごきます。チン、チン、チン。」

うんてんしゅの あきらさんが いうと、でんしゃは 走りだしました。

みんなは、足を そろえて 早くあるきました。

「つぎは『やくばまえ』おおりの かたは ありませんか。」



しゃしょうさんが いいました。だれも おりません。

とまると、ふたり のりました。

「うごきます。チン、チン、ゴー。」

でんしゃは また、走りだしました。

「つぎは『学校まえ』です。おおりの かたは お早く ねがいます。」

とうばんの てるおさんが おりました。それに つづいて 五人ばかり おりました。

おりる　人が　すむと、あたらしく　三人・のりました。

「うごきます。チン、チン、ゴー。」

せんろの　上で、一年生が　あそんでいました。

「ガチャン。」

あきらさんは、大きな　声で　いいながら、ブレーキを　かける　まねをして、きゅうに　とまりました。

「あぶない、あぶない。せんろで、あ



そんでは　いけないよ。」

あきらさんが、ほんとうの　うんてんしゅのように　いったので、みんな　わらいました。

「つぎは『ふもと』です。『のうえんゆき』の　かたは、おのりかえください。」

しゃしょうさんが、また　大きな　声で　いいました。

五人　おりたので、でんしゃ

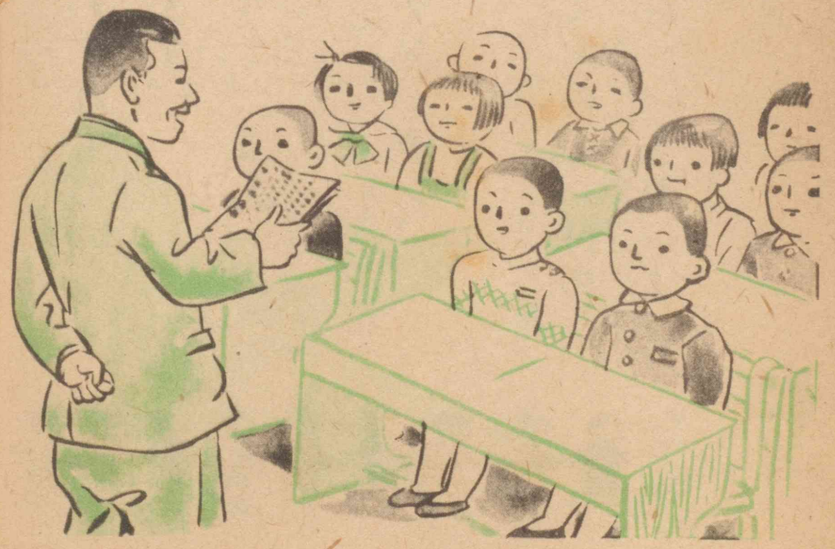
の　中が、たいへん　すいて
きました。
「うごきます。チン、チン、ゴー。」
でんしゃは　かるい　足どりで、早く　走りました。
「ゆうびんきょくまえ」で、また　六人　のったので、でんしゃは　まんいんで　走りつづけました。
「つぎは『大通り、大通り』。『みなとゆき』、『こうえんゆき』の　かたは



おのりかえです。おわすれもののないように　ねがいます。」
ここでは　六人　おりて、五人　のりました。
「うごきます。チン、チン、チン。
ゴー、ゴー、ゴー。」
でんしゃは　しゅうてんの『いけの』はた』に　むかって、また　いきおいよく　走りだしました。

## 四　うちの　畑

「あきらさんの　作文は、
りっぱだったね。」
と、先生が　おっしゃいました。
みんなが、あきらさんの
方を　むきました。あきらさんは　口を　むすんで、





うれしそうに　先生を　みました。
「『うちの　畑』と　いう　だいです。みなさん　どう
思いますか。」
と　いって　先生は、ゆっくり　お読みに　なりました。

やけあとの　いねが　よく　できました。
にわ　一めん、き色に　なって　います。
おもそうに　ほを　たれて　います。
ぼくが　ほに　さわると、さらさらと　こぼれそう
です。

あさ　ばん、「チュウ　チュウ」と、すずめが　よってきます。

この　あいだ、おじいさんが、かかしを　つくりました。

やぶれた　もんぺを　はいて、大きな　麦わらぼうしを　かぶっていました。

かかしの　かおは、ねえさんが　かきました。

「まさ子、この　かおは　わらっ

て　いるのか、おこって　いるのか。」

と、おとうさんが　よく　おっしゃいます。

なるこも　おじいさんが　つくりました。

うちじゅう　かわるがわる、

「カラン、カラン、カラン。」

と、なるこを　ならします。弟も　つなを　にぎって

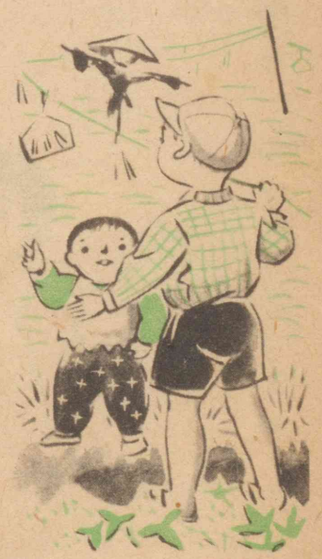
よろこびます。

「ことしは、うちの
畑も　ほうねんだ。
一ぴょうは　とれ"
るよ。」

と、おとうさんが　おっしゃって　います。

この　つぎの　日よう日は　いねかりです。かいしゃ"
から、おとうさんの　お友だちが　お手つだいに　きて
くださるそうです。

いま、さつまいもや　まめも　できて　います。だい"



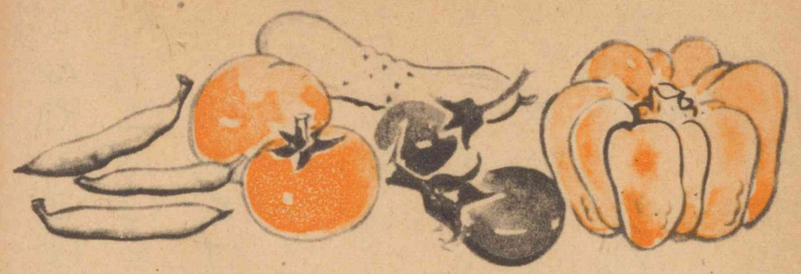


こんや、ごぼうや、にんじんも、
青々と　はを　だして　います。

やけあとは、早く　夜が　あけ"
ます。おへやが　三つしか　あり"
ませんから、ガラスまどが　すぐ
あかるく　なります。

ですから　五時　まえには、みんな
おきて、畑の　手いれを　します。

ことしは　うちで　できた　かぼちゃ"
や、トマトや、なすや、いんげんを



たくさん　いただきました。

おじいさんが、

「家は　やけたが、こんなに　畑が　でき
るように　なって　うれしいな。」

と　おっしゃいました。

ぼくは　畑の　せわを　するのが　だい
すきです。

みんな　パチ　パチと　手を　たたきま
した。



## 五　赤ずきん

むかし、小さい、かわいらしい　女の　子が　ありま
した。だれでも　この　子を　みると、かわいがらずに
は　いられなかったのですが、一ばん　かわいがって
いたのは、この　子の　おばあさんです。おばあさんは
この　子に　なにを　やったら　いいか、わからない く
らいでした。

ある　時、おばあさんは、この　子に　赤い　ビロー

ドの　ずきんを　やりました。それが　たいへん　よく
にあって、この　子は　ほかの　ものを　かぶろうと
しなかったので、みんなが　この　子の　ことを、「赤ず
きん、赤ずきん」と　よびました。
ある　日、おかあさんが　この　子に　いいました。
「おいで、赤ずきんや。ここに　おかしが　一つと、ぶ
どうしゅが　一本　あるからね。これを　おばあさん
の　ところへ　もって　おいで。おばあさんが、これ
を　めしあがると、とても　元気が　でるのよ。
早く　おでかけ。



外へ　でたら、ほんと
うに　おとなしく　あ
るくのよ。わき道に
それないようにね。そ
うしないと、ころんで
びんを　こわしますよ。
そしたら、おばあさん
に、なにも　あげられ
なく　なるからね。
おばあさんの　おへや

に　はいったら、『おはよう』と　いう　ことを　わす
れないようにね。そこらを、きょろきょろ　みまわし
ては　いけませんよ。」
「ええ、きっと　よく　気を　つけるわ。」
と、赤ずきんは、おかあさんに　あいさつして　でかけ
ました。
おばあさんは　村から　だいぶ　はなれた、森の　中
に　すんで　いました。
さて、赤ずきんが　その　森の　中に　はいりますと、
おおかみに　であいました。ところが、赤ずきんは、そ



れが　どんなに　わるい　けだものでは　あるかと　いう
ことを　知らなかったので、こわがりませんでした。
「こんにちは、赤ずきんさん。」
と、おおかみは　いいました。
「ありがとう、おおかみさん。」
「赤ずきんさん、こんなに　早くから　どちらへ。」
「おばあさんの　ところへ。」
「まえかけの　下に、なにを　もって　いるの。」
「きのう　やいた　おかしと、ぶどうしゅよ。おばあさ
んは　びょうきで、よわって　いるので、これを　め

しあがると、元気が
つくの。」
「赤ずきんさん、おばあ
さんの　おうちは　ど
こ。」
「この　森の　おくで、
まだ　十五分は　たっ
ぷり　かかるの。三本
の　大きな　かしの
木の　下に、おばあさ

んの　うちが　あるの。下に　くるみの　いけがきが
あるから、すぐ　わかるわ。」
と、赤ずきんは　いいました。
おおかみは、はらの　中で　考えました。
この　おさない　やわらかい　子どもは、あぶらが
あって、うまいぞ。おばあさんより　うまいぞ。そうだ。
ふたりとも　ぱっくり　やれるように、うまく　だまし
て　やろう。
そこで、おおかみは　すこしの　あいだ、赤ずきんと
ならんで　あるきましたが、やがて、

「赤ずきんさん、あたりに　さいて　いる　きれいな
花を　ごらんなさいよ。なぜ、まわりを　みないの。
小鳥が、あんなに　かわいらしく　うたって　いるの
が、きこえないんだね。まるで　学校へでも　いくよ
うに、むきに　なって　あるいて　いるんだね。森の
中は、こんなに　おもしろいのに。」
赤ずきんは　目を　みはりました。そして、たいよう
の　光が　木の　あいだを　もれて、あちこちに　おど
て　おり、どこも　うつくしい　花で　いっぱいなのを
みると、

「おばあさんに　みずみずしい
花たばを　もって　いって
あげたら、きっと　およろこ
びに　なるわ。まだ　たいへ
ん　早いんだから、じゅうぶ
ん　まに　あうように　いけ
るわ。」
と　考え、道を　はなれて、森
の　中へ　はいり、花を　さが
しました。

ところが、おおかみは
まっすぐに おばあさん
の うちへ やって い
き、戸を たたきました。
「外に いるのは だあ
れ」。
「赤ずきんよ。おかしと
ぶどうしゅを もって
きたの。あけて ちょ
うだい」。

「ああ、赤ずきんかね。とっ手を おして おくれ」。
と、おばあさんは 声を はりあげて いいました。
「わたしは よわって いて、おきられないから」。
おおかみは とっ手を おすと、戸が いきおい よ
く あいたので、ひとことも いわず、まっすぐに お
ばあさんの ねどこに いって、おばあさんを うのみ
に して しまいました。
それから おばあさんの きものを きて、ずきんを
かぶり、おばあさんの ねどこの 中へ はいって、カ
ーテンを ひきました。

その　ころ、赤ずきんは、花を　さがして　かけまわり、もちきれないほど　花を　あつめると、おばあさんの　ことを　思いだし、いそいで　おばあさんの　うちへ　いきました。

戸が　あいて　いるので、へんだと　思いました。

へやの　中に　はいると、いっそう　ようすが　かわって　いるので、「おや、どうしたんだろう。きょうは　とても　むねが　どきどき　するわ。いつもは　おばあさんの　ところに　くると、うれしいのに。」と　思いました。



赤ずきんは、

「おはよう。」

と、大きな　声で　いいましたが、返事が　ありません。そこで　しんだいの　そばへ　いって、カーテンを　ひらきました。

そこには　おばあさんが　ねて　いましたが、

ずきんを　ふかく　かおに　かぶって、どても　へんな
かっこうを　して　いました。
「まあ、おばあさん、おばあさんは　なんて　大きな
耳を　して　いらっしゃるの。」
「おまえの　いう　ことが、いっそう　よく　きこえる
ように。」
「まあ、おばあさん、おばあさんは　なんて　大きな
目を　して　いらっしゃるのでしょう。」
「おまえを、いっそう　よく　みる　ことが　できるよ
うに。」



「まあ、おばあさん、おばあさんは　なんて　大きな
手を　して　いらっしゃるのでしょう。」
「おまえを、いっそう　よく　つかまえる　ことが　で
きるように。」
「でも、おばあさん、おばあさんは　なんて　おそろし
く　大きな　口を　して　いらっしゃるのでしょう。」
「おまえを、いっそう　よく　たべる　ことが　できる
ように。」
そう　いうか　いわない　うちに、おおかみは　しん
だいから　ひととびに　とびおりて、かわいそうに　赤

ずきんを　うのみに　して　しまいました。
おおかみは、　また　しんだいに　よこに　なって
ぐっすりと　ねこみ、大きな　いびきを　かきはじめま
した。
ちょうど　その　時、その　家の　まえを　りょうし
が　通りかかり、「おばあさん、ひどく　いびきを　かい
て　いるな。どこか　わるい　ところでも　あるんじゃ
ないか、みて　あげなくちゃ。」と　思いました。
そこで、へやの　中へ　はいって、しんだいの　まえ
に　いって　みると、おおかみが　ねて　いました。

「この　わるものめ、ここに　いたのか。」
と、りょうしは　いいました。
「長い　こと　さがしたぞ。」
そして、てっぽうの　ねらい
を　さだめようと　しましたが、
おおかみは　おばあさんを　た
べたかも　知れない。そして、
まだ　たすかるかも　知れない
と　思いつきました。
そこで、てっぽうを　うつの

を　やめて、はさみを　とり、ねむって　いる　おおかみの　はらを　切りひらき　はじめました。

二三ど　はさみを　うごかすと、あざやかな　赤ずきんが　目に　はいりました。

また　すこし　切ると、女の　子が　とびだして　さけびました。

「ああ　こわかった。おおかみの　おなかの　中は　ほんとうに　まっくらだ。

ったわ。」

それから、おばあさんも　でて　きましたが、いきも　できないくらいでした。

赤ずきんは、すばやく　大きな　石を　もって　きて、おおかみの　おなかへ　つめました。

おおかみは　目を　さますと、はねて　にげようと　しましたが、石が　あんまり　おもいので、すぐに　へ。たへたと　たおれて　しんで　しまいました。

三人は　大よろこびでした。

りょうしは、おおかみの　けがわを　はいで、もって　かえりました。

おばあさんは、赤ずきんの　もって　きて　くれた　おかしを　たべ、ぶどうしゅを　のみ、元気を　とりかえしました。

赤ずきんは、おかあさんに　とめられたら、ひとりで　道を　はなれて、森の　中へ　はいって　いくような　ことは、二どと　しないように　しようと　思いました。



## 六　おつかい

おかあさんの　手紙を　もって、ポストへ　いきました。

手を　ふりふり　いくと、ゆうやけの　道が　きれいでした。

赤い　ポストに　ついて　せのびを　したら、やっと

とどきました。

「ポトン。」

音が　して、手紙が　はいりました。

手を　うって、うたを　うたいながら　かえりました。

○

おじいさんと、山の　畑へ

いった。

山の　畑は　ゆう日で　あ〟

かるい。

あぜに　こしを　かけると、

くりの　はが　ぱらぱら　ちり〟

かかる。

あたたかい　くりの　おちば。

おじいさんの　せなかにも

ちりかかる。

○

にいさんが、ふねに　のせて　くれました。

キラ　キラ　キラ、光った　波に　かこまれました。

波を　みて　いると、ひとりでに　目が　ほそく

なりました。

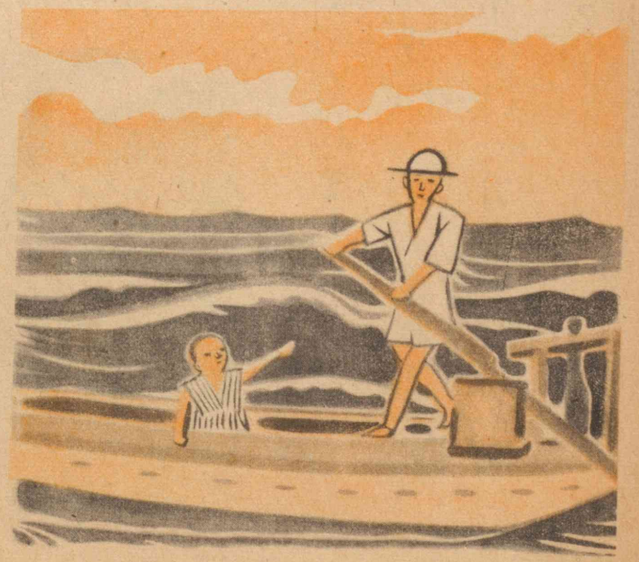
にいさんも　目を　ほそくして、ギイッコ　ギイッコ、ふねを　こいで　います。

キラ　キラ　キラ、光った波の　上を、

スウッ　スウッ　スウッ、すべって　いきます。

○

だいこんぬきは　すみました。かごで　はこびます。





ぼくの　かごにも　一ぱい　入れました。おかあさんに　しょわせて　もらいました。

おかあさんの　手が　かごから　はなれると、うしろへ　ひっぱられそうでした。

はっぱが　くびに　あたって、ひやりと　します。

ぎしぎし　だいこんが　なりました。

つめたそうな　音です。

あるいて　いる　あいだ、ぎしぎし　なりました。

○

わたしの　お手玉。
おかあさんに　つくって
もらった　赤い　お手玉。
おにわで、ひとり　お手
玉を　とって　いる。
日の　よく　あたる　しずかな　おにわ。
お手玉を　とる　わたしの　かげが、
きれいに　うつって　うごく。

どこかで　ピアノが　なって　いる。
ひい、ふう、みい、よう、
お手玉を　とって　いる。
ピアノの　音を　ききながら、
赤い　お手玉、じょうずに
とって　いる。

○

けい子の　おもりを
しました。
こたつに　あたって

あそびました。

さとるに　お話を　して　やりました。

さとるが、目を　まるく　して　ききました。

けい子も　いい　子を　して　いました。

それでも、おかあさんが　早く　山から　かえって

くると　いいと　思いました。

○

ゆうがた　ふろたきを　しました。

ふろの　かまどは　まっかです。

よく　もえて　います。



紙くずを　まるめて　入れると、ごうごうと　いいます。

つよい　火が、うずまきに　なって　あがります。

その　あと、ぱちぱちと

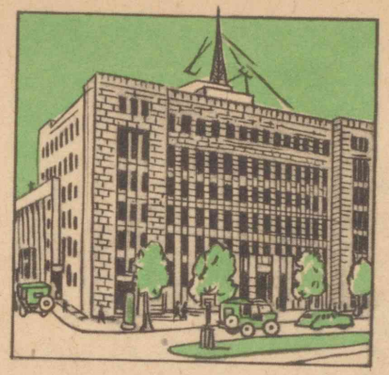
よく　もえます。

わたしは　あたたかい

火を　みながら、ひとりで

ふろたきです。

## 七　ラジオごっこ



あきらさんたちは　きょうしつで、ラジオごっこを　しました。きょうだんの　ところを　ほうそう"しつに　して、まんなかに　マイクロ"ホンを　おきました。ボール紙で　つくった　ものです。よこに　アナウンサーの　せきも　つくり、そこにも　マイクロホンを　おきました。

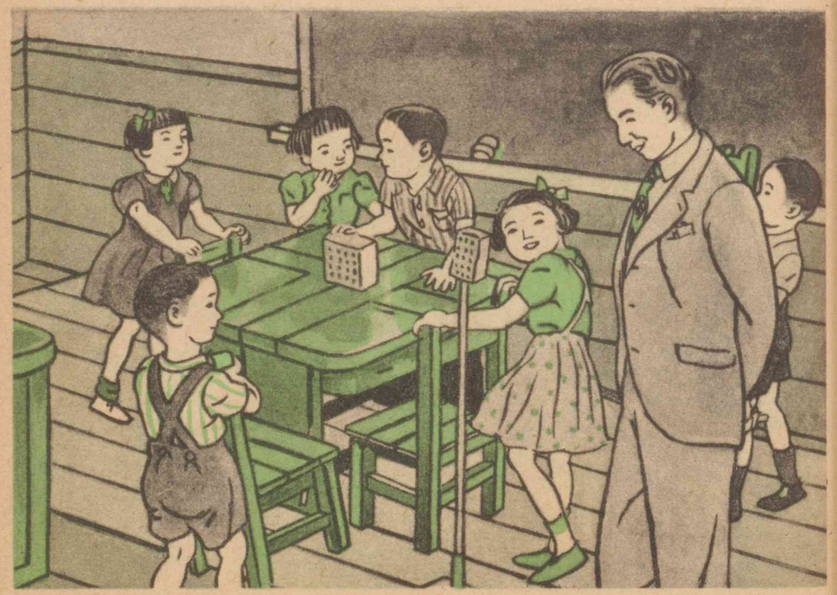


「ほう、なかなか　いい　ほうそうしつだね。」

先生は　こう　おっ"しゃって、ききての　ひ"とりに　なりました。

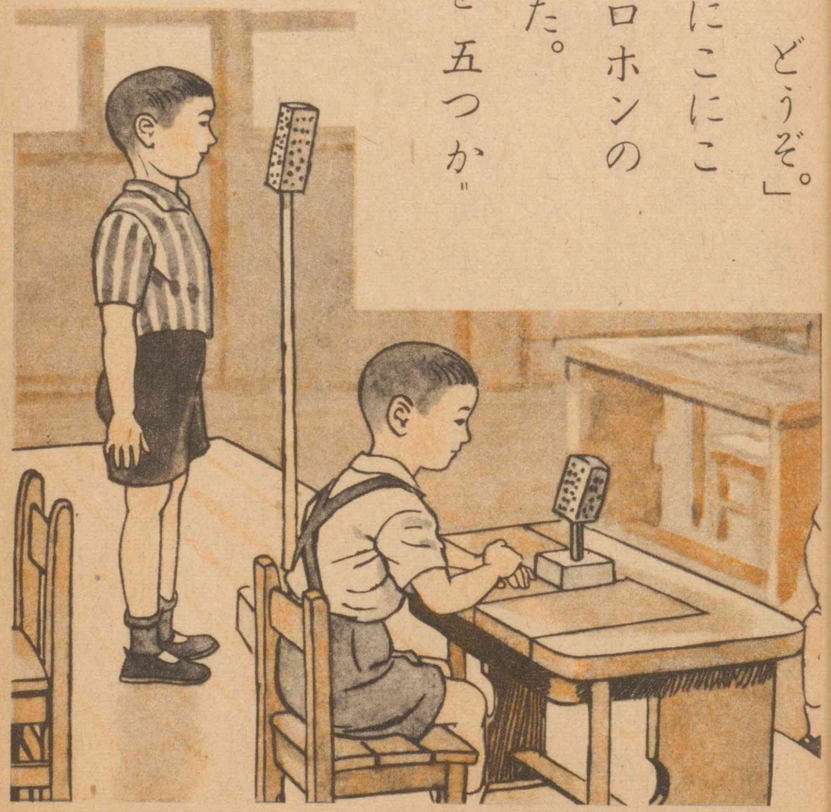
としおさんが　アナウ"ンサーです。

「これから　おひるの　ほうそうを　はじめま"す。きょうの　ばん組"



は、
『なぞ、
一口話、
早口あそび』
の　三つです。おしま
いまで　ゆっくり　お
きき　ください。
では、さっそく　よし
おさんの、『なぞ』から
はじめて　いただきま
す。

す。よしおさん　どうぞ。」
よしおさんが　にこにこ
しながら、マイクロホンの
まえに　立ちました。
「ぼくは、『なぞ』を　五つか
けます。こた
えは　みなさ
んで　考えて
ください。
では　いいま



すよ。

『一ばん。水の　中に　おちても、けっして　ぬれない　ものは　なんですか。』

『二ばん。とっても　とっても、へらない　ものは、なんですか。』

『三ばん。夜も、ひるも、両手で　かおを　なでて　いる　ものは　なんですか。』

『四ばん。けずれば　けずるほど、大きく　なる　もの　は　なんですか。』

『五ばん。すわると　高く　なって、立つと　ひくく



なる　ものは　なんですか。」

よしおさんの　五つの「なぞ」に、みんな　あたまを　かしげて　考えこみました。

としおさんが、

「では　つぎに、『一口話』を、あきらさんと　みつ子さんに　おねがい　します。」

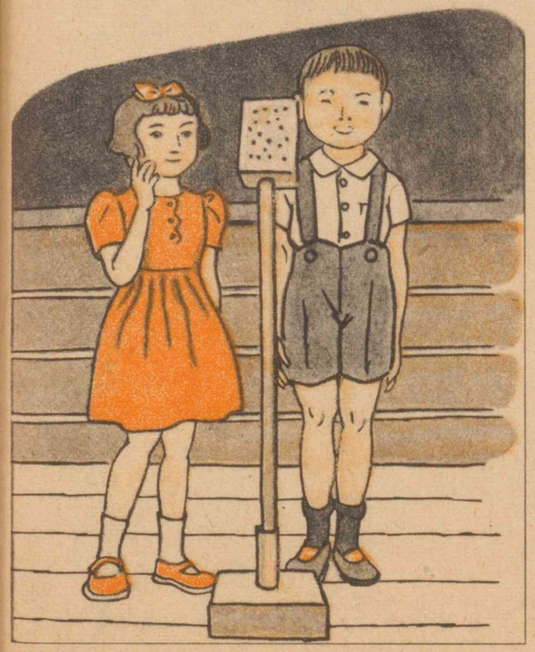
と　いいました。

あきらさんと、みつ子さんは、ならんで　でて　きました。

あきらさんから　はじめました。

「おとなりから　弟が　かえって　きて、『にいちゃん、おとなりの　おばさんは、ちっとも　かずを　知らないね。』と　いいました。『どうして。』と　たずねると、『だって、ぼくに　あめを　五つ　くれて、一つですけれど、といったよ。』と　こたえました。」

あきらさんが　にこにこして　いうと、みんなが、





「あはははは——。」

と、大きな　声で　わらいました。

こんどは　みつ子さんです。

「はるえさんが、『八時二十五分に　でた　汽車は、いまどこを　走って　いるでしょう。』と　ききますと、みきおさんが、『レールの　上さ。』と　まじめな　かおつきで　いいました。」

みんな、また　大きな　声で　わらいました。

としおさんも　わらいながら、

「おもしろい　一口話でした。では、おしまいは　まさ

おさんの、『早口あそび』です。まさおさん、はじめてください。」

まさおさんも、にこにこ して、マイクロホンの まえに でて きました。

「早く いいますから、ちゅうい して きいて いてください。四つ いいます。」

と いって、小さな 紙を ひろげました。

「れんがの まどに でんきが みえる。」

「むこうの 竹やに 竹 立て かけた。」

「長まちの ななまがり、長い ななまがり。」



「青まきがみ、赤まきがみ、きまきがみ、ひまきがみ。」

四つとも まちがわずに、たいへん 早く いったので、みんな かんしんして、手を ぱちぱち たたきました。

あんまり おもしろいので、もっと つづける ことに しました。

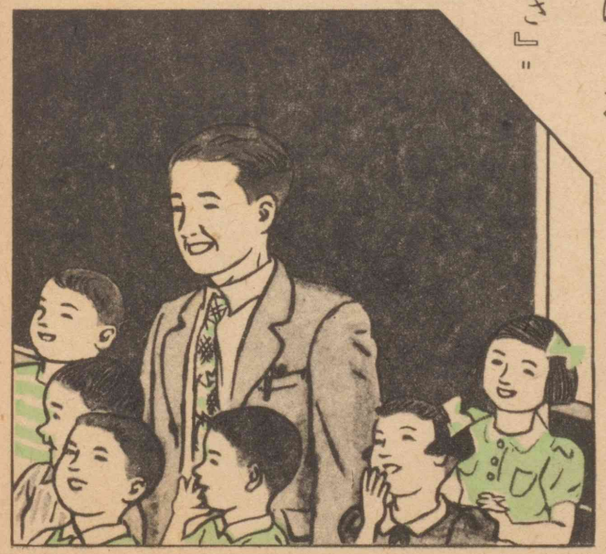
なにに しようかと そうだんして、みんなで「学校」

ほうそう」を する ことに しました。
こんどは、先生にも はいって いただく ことに しました。
みんな、マイクロホンの まわりに あつまりました。
アナウンサーには、やっぱり、としおさんが つづけて なりました。
「こんどは、学校ほうそう 二年生の 時かんです。先生と 二年生の お友だちが、大ぜい おあつまりに なって います。これから お話を して ください。ます。」



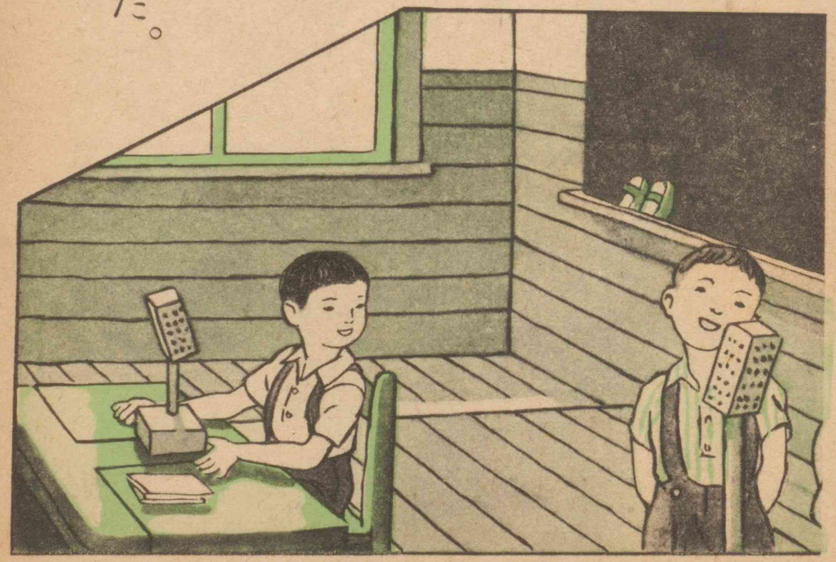
と いいました。
先生が、
「お話しあいは、『この ごろの わたしたち』と いう だいが いいでしょう。だれからでも いいから はじめて ください。」
と、すこし かわった くちょうで おっしゃいました。
あきらさんが、
「ぼくは このごろ、うちの にわとりに えさを やることに きめました。
ぼくが にわとりごやに いくと、にわとりが よろ

こんで、くびを　のばして　かけて　きます。」
「わたくしは、この　あいだから　グリムの　お話を
読んで　います。その　中に、『お
おかみと　七ひきの　子やぎ』
と　いう　おもしろい　お
話が　ありました。みな
さんも　読んで　みたら
いいと　思います。」
と、よし子さんが　つづけて
お話を　すると、うし





ろの　方から、だれかが、
「その　本、ぼくに　かして
てね。」
と　いったので、としおさ
んが、
「いま　ほうそうして　い
ますから、かってな　お話
を　しては　こまります。」
と、わらいながら　いいました。
みんなも　わらいだしました。



# 八　雪うさぎ

さむい　夜です。

あきらが、火ばちに　もたれて、本を　読んで　います。

あきら「さむいなあ。」

ごほん　ごほんと、せきを　します。

あきら「ぼく、かぜを　ひいたかな。もっと　炭を　たして、あたたかく　しよう。」

あきらは、火ばちに　炭を　たします。

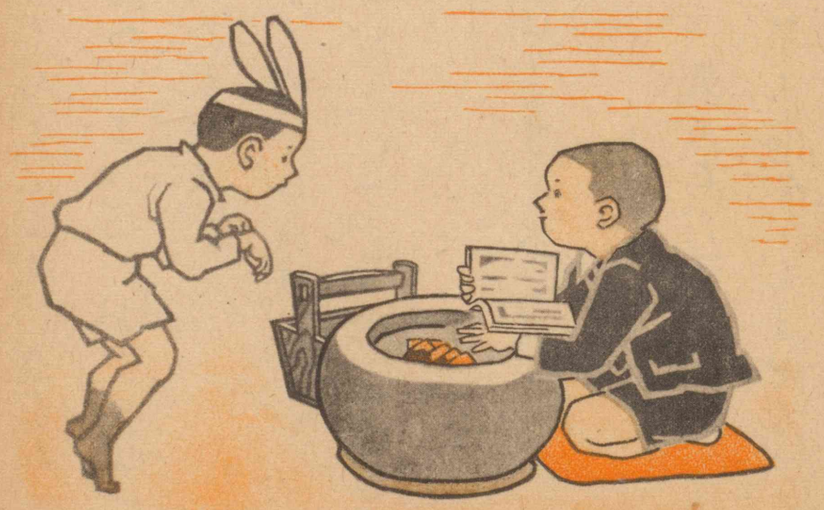


ぴょん　ぴょんと　白うさぎが、とびながら　でてきます。

雪うさぎ「あきらさん　こんばんは。」

あきら「きみは　だれだい。」

雪うさぎ「ぼくは　きょう、あきらさんが　つくって　くれた　雪うさぎですよ。」



あきら「ああ、きみが　雪うさぎくんか。よく　きたね。
さあ　あそぼう。こっちへ　よって　おいでよ。
火ばちは　とても　あたたかだよ。」

雪うさぎ「ぼくは　ここの　ほうが　いいんです。」

あきら「そんな　ことを　いわないで、こっちへ　よって
おいでよ。」

あきらは、むりに　うさぎを　ひっぱりよせて　火ばちに
あたらせます。

あきら「ね、あたたかくて、いい　気もちだろう。」

雪うさぎ「ぼく、ちっとも　いい　気もちが　しません。」

あきら「おや、へんだよ。
きみは　なんだか
元気が　なく　なっ
たよ。さむいの
かい。」

雪うさぎ「すこし　気もちが
わるく　なって
きました。」

あきら「さ、もっと　こっ
ちへ　よって、火

ばちに　あたると　いいよ。」

雪うさぎ「ぼく、病気に　なりそうです。」

あきら「きみ、ねつが　でて　きたね。どうしたら　いい〃のかな。こまったなあ。」

その時、外で　たくさんの　雪うさぎが、声を　そろえて　いいます。

うさちゃん　おいでよ、　外へ　おいでよ。
外には　つめたい　風が　ふいて　いる。
おまえは　雪で　つくった　うさぎ。



火ばちの　そばでは　病気に　なるよ。

あきら「あっ　そうだ。きみは　雪うさぎだったね。火ば〃ちの　そばへ　くると、とけて　しまうんだっ〃たね。じゃ、戸を　あけて　あげるから　外へ　おいでよ。」

あきらが　戸を　あけると、たくさんの　雪うさぎが、ぴょん　ぴょんと　はいって　きます。

雪うさぎ「うさぎちゃん、あそぼう。むかえに　きたよ。」

雪うさぎ「ありがとう。」

雪うさぎ二「外は　つめたくて、いい　気もちだよ。」

雪うさぎ三「さあ、外へ　いって　あそぼう。」

雪うさぎたちは　ぴょん

ぴょんと　おどります。

雪うさぎ「さあ、あきらさん

も、いっしょに

おどりましょう。」

あきら「うん、おどろう。」

こんどは　あきらも

いっしょに　おどります。

あきら「ああ　いい　気もち

ちだ。火ばちに

あたるより、あた

たかく　なったよ。」

雪うさぎ「それでは、あきらさん、さようなら。あした

また、外で　あそびましょう。」

あきら「うん、あそぼうね。」

雪うさぎたちは、ぴょん　ぴょん　おどりながら

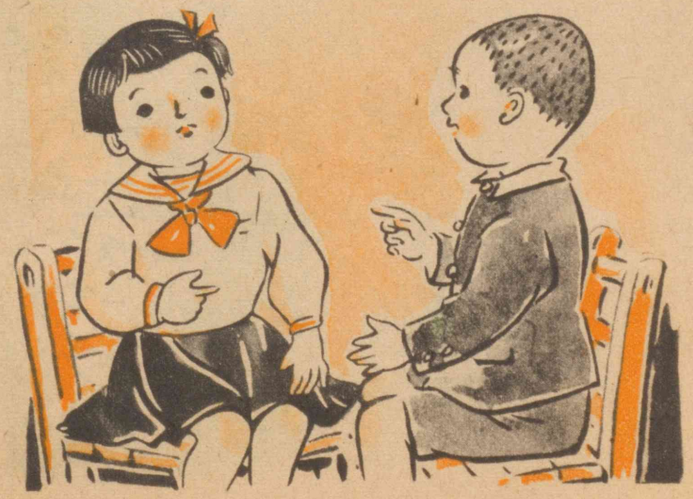
かえります。

## 九　へやの　中で

### （一）ついの　ことば

ふたりで、ついに　なる
ことばを　かわるがわる
いって　みましょう。

さむい――あつい。
つよい――よわい。
ひくい――高い。

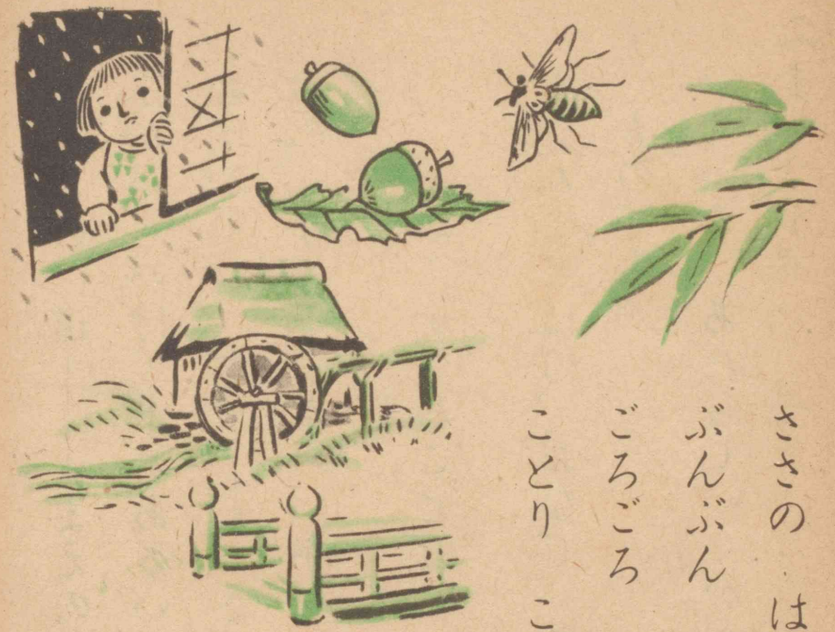




うしろの　道――まえの　道。
ふかい　いけ――あさい　いけ。
むずかしい　本――やさしい　本。
右の　手――左の　手。

### （二）かさねことば

かさねことばは、おなじ　音や　ことばを　くりかえす　ものです。
いろいろ　あたらしい　かさねことばを、つくって　みましょう。



ささの　は　さらさら　さあらりこ。
ぶんぶん　みつばち　ぶんと　とべ。
ごろごろ　かみなり　ごうろごろ。
ことり　こっとん　水車。
ころころ　どんぐり　こ〃
うろりこ。
ぎんぎん　ぎらぎら　ぎ〃
んの　はし。
ちらちら　小雪　ちらち〃
ら　ふるよ。

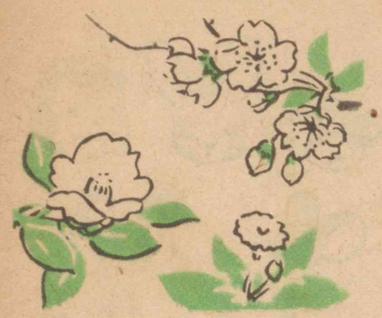


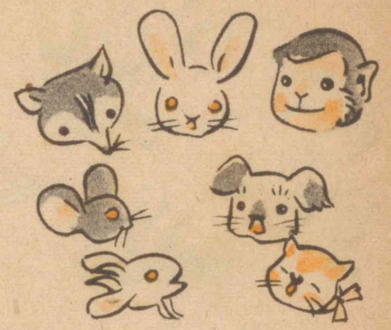
## (三)　いいまわし

大ぜいで、いいまわしあそびを　して　みましょう。木とか、花とか、虫とか、目あてを　きめて、その　名〃まえを　じゅんじゅんに　いいまわす　あそびです。

はじめに、花で　して　みましょう。

さくら——つばき——たんぽぽ——す〃
みれ——れんげそう——アネモネ——ダ〃
リヤ——あさがお——きく——コスモス
——すいせん——ふくじゅそう——。





こんどは、どうぶつの　名で　いって　みましょう。

きつね――たぬき――ねこ――ねずみ――犬――さる――しか――くま――とら――きりん――らくだ――おおかみ――ひつじ――牛――うま――ぶた――。

いくらでも　いえそうですね。

こんどは、なにに　しましょうか。

つまったり、おなじ　ことを　二ど　いった　人は、なにか　げいを　して　みせる　ことに　しましょう。



## （四）きおくあそび

これは　また　おもしろい　あそびです。

まず、じゃんけんで　まけた　人が　おぼんの　上に、いろいろな　ものを　のせて　おきます。たとえば、えんぴつ、ふでばこ、けしゴム、マッチなど、十二三こを　ならべて　おいて、その　上に　ふろしきを　かぶせて　おきます。

用意が　できると、となりの　へやに　まって　いた　人が、ひとりずつ　おぼんの　そばへ　きて、ふろしきを

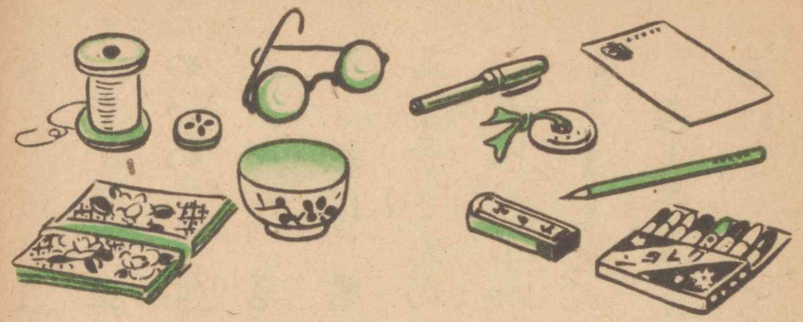
を　とりのぞいては、中のしなを　みます。立ちどまっ
ては　いけないのです。あるきながら　みるのです。
こうして　みんな　おわったら、めいめい　おぼんの
上に　あった　しなものを　おぼえて　いるだけ、
紙に　書いて　だします。
一ばん　たくさん　おぼえて　いて、ただしく
書けた　人が　かちに
なります。

いま、あきらさんと、みよ子さんと、しげるさんと、
よし子さんの　四人が、やって　います。
「じゃんけんぽん、
あいこでしょ。
じゃんけんぽん——」。
みよ子さんの　まけに　なりました。
三人は、おとなりの　へやに　まって　いる　ことに
しました。
みよ子さんは　おぼんの　上に、えんぴつ、クレヨン、
はがき、けしゴム、ふで、まんねんひつ、くし、目がね、

ぼたん、ちよ紙、ちゃわん、糸まきの、十二しなを　な
らべて、その　上に　ふろしきを　かけました。
それから、三人を　じゅんばんに　よびました。
あきらさんが、はじめに　きました。
あるきながら　ちょっと　ふろしきを　あけて、に
こっと　わらって　かえりました。
つぎは　しげるさんでした。
しげるさんは、すこし　立ちどまりそうに　なりまし
たが、すぐ　気が　ついて、あるいて　いきました。
よし子さんは　ちょっと　のぞくと、すまして　いっ



て　しまいました。
やがて　三人は、
めいめい　おぼえ
て　いた　名まえ
を　紙に　書いて、
みよ子さんの　と
ころへ　もって
いきました。
みよ子さんが、
あけて　みると、つぎのようでした。



あきらさんの　こたえ。
えんぴつ――目がね――ちゃわん――
くし――クレヨン――ふで。
しげるさんの　こたえ。
えんぴつ――クレヨン――はがき――
ちゃわん――けしゴム――目がね――ふ〟
で――すみ――すずり。
よし子さんの　こたえ。
クレヨン――はがき――けしゴム――
ちょ紙――糸まき――ぼたん――まんね〟



んひつ――目がね。
みよ子さんは、つぎのような　てんを　つけました。

| | |
|---|---|
| あきらさん | 六てん |
| しげるさん | 七てん |
| よし子さん | 八てん |

これで　よし子さんが　一ばん、しげるさんが　二ば〟ん、あきらさんが　三ばんに　なりました。
つぎは、しげるさんが　おぼんがかりに　なって、あ〟そぶ　ことに　なりました。
こんどは　なにを　ならべるでしょう。

しげるさんは　ただしい　こ〟たえが　七つ、まちがいが　二〟つ、ですから　七てんです。

## 十　たろうさんへ

たろうさん、おかぜは　まだ
よく　なりませんか。「ごほん　ごほん」と、やっぱり　せきが　でますか。

きょうのように、山の　方から
つめたい　風が　ひどく　ふいて
くると、ねて　いる　たろうさん

の　ことが　ひとりでに　思いだされて　きます。

「この　風　いやだなあ。たろうさんの　うちの　方へ　むいて　ふいて　いるよ。」

「風々、おまえの　あそびば　こなんだ。そっちへ　ふいては　だめなんだ。」

と、さっきも　みんなで　たろうさんの　うちの　方を　ながめながら、風に　いって　みたり　し

ました。
先生も　しんぱいそうに、
「ひどい　風だね。ねて　いる　たろうさんには、わる
いね。」
と　おっしゃって　いました。
あたたかく　して、ねて　いらっしゃい。その　うち
に　きっと　よくなります。　さようなら
二月四日　　しげる
たろうさんへ
○



たろうさん、おかぜは　どうですか。
ぼくは　学校へ　くると、すぐ　たろうさんを　さが
します。どこにも　みえないので、「きょうも　まだ　お
やすみかな。」と、がっかり　します。
つくえの　中に　おどうぐを　入れながら、たろうさ
んが　いなくても、
「おはよう、たろうさん。」
と　いって、あいさつを　します。
たろうさんが　こないので、ぼくの　よこの　せきだ
けが　あいて、なんだか　よけい　さむいようです。け

れども、ぼくは　ひとり"で　元気よく　べんきょ"うして　います。たろう"さんが　くるまでは、ふ"たりぶん　べんきょうし"て　おきます。

ぼくは、「たろうさんの　ノート」と　いうのを　つ"くりました。これに　先生の　お話や、友だちの　はっ"ぴょうした　ことを　みんな　書いて　います。その

ほか　ぼくの　ノートと　おなじように、べんきょうの　ことを　いっぱい　書いて　います。

うちへ　かえる　時、この　ノートを、たろうさんの　つくえの　中に　入れて、

「さようなら、たろうさん。」

と　いいます。

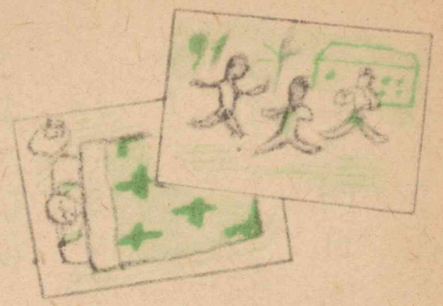
早く　よく　なって、学校へ　いらっしゃい。まって"います。

さようなら

二月四日

たろうさんへ

あきら



○

たろうさん、わたくしの　かいた
えを、二まい　おくります。
一まいは、きのうの　かけっこの
えです。さむくても　みんな　こんな
に　元気です。
かけっこの　すきな　たろうさんは、これを　みると
にこにこ　するでしょう。そして、早く　元気に　なって、
また　いっしょに　かけっこを　しましょう。
もう　一まいは、たろうさんの　ねて　いる　ところ



を　考えて　かきました。
このように　おふとんを　よく　きて、ねて　いない
と　だめですよ。
こんどの　日よう日に、みつ子さんたちと　いっしょ
に　おみまいに　いきます。　さようなら
二月四日　よし子
たろうさんへ

○

たろうさん、気分は　いいでしょうか。ねつは　さが
りましたか。

「たろうさん、早く　なおって　学校へ　こないかなあ。みんな、こう　いって　まって　います。

わたくしは、紙しばいを　つくりました。

きょう、お友だちに　みせて　あげました。みんな、手を　パチパチと　たたいて　よろこびました。

おとうさんに　かって　いただいた　本に　ある、「おさると　子りす」の　お話を　かいたのです。

日よう日には　もって　いって、たろうさんにも　みせて　あげたいと　思って　います。たのしみに　して　まって　いて　ください。

さようなら

二月四日

ふさ子

たろうさんへ

○

たろうさん　おかぜは　どうですか。早く　元気に　なると　いいのにね。

ぼくは　きょう、うちの　にわに　さいた　すいせんの　花を、たくさん　学校へ　もって　きました。

「いい　においだなあ。この　花を　たろうさんにも　あげよう」。

と、みんなで　話しあって、半分　たろうさんに　あげる　ことに　しました。

たいくつ　したら、この　花を　みて　ください。そして、しずかに　ねて　いると、きっと、よく　なるに

ちがい　ない。ぼくは、花たばを　つくりながら　こう　思いました。

たろうさんは、ふだん、あんなに　じょうぶなのだから、ほかの　人の　時より、早く　よく　なると　思いますよ。もう　しばらく　がまんして　いらっしゃい。

さようなら

よしお

二月四日

たろうさんへ

## 十一　むかし話

### （一）うらしまたろう

むかし、うらしまたろうと　いう　人が　ありました。
ある　日、はまべを　通ると、子どもが　大ぜいで、
かめを　つかまえて　あそんで　いました。
うらしまは　かわいそうに　思って、その　かめを
かって、海へ　はなして　やりました。
それから　二三日　たって、うらしまが　ふねに　のって



て、つりを　して　います。
と、大きな　かめが　でて
きて、
「うらしまさん、この　あいだは　ありがとう　ございました。お礼に　りゅうぐうへ　つれて　いって　あげましょう。わたくしの　せなかに　おのりなさい。」
と　いいました。

うらしまが　よろこんで　かめに　のると、かめは
だんだん　海の　中へ　はいって　いって、まもなく
りゅうぐうへ　つきました。
りゅうぐうの　おとひめさまは、うらしまの　きたの"
を　たいそう　よろこんで、毎日　いろいろな　ごちそ"
うを　したり、さまざまな
あそびを　して　みせたり
しました。
うらしまは　おもしろがっ"
て、うちへ　かえるのも　わ"

すれて　いましたが、その
うちに　かえりたく　なって、
おとひめさまに、
「いろいろ　おせわに　なり"
ました。あまり　長く　な"
りますから、もう　おいと"
ま　いたしましょう。」
と　いいました。
おとひめさまは、
「それは　おなごり　おしい　ことで　ございます。そ"

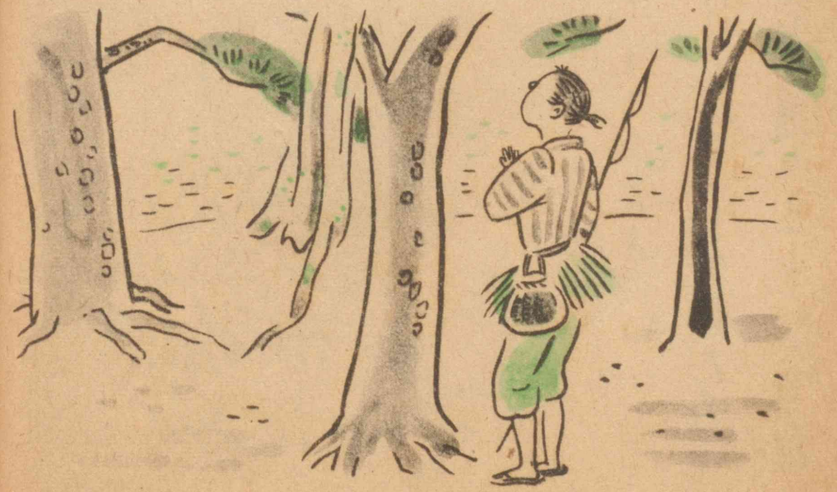
れでは、玉手ばこを　あげます。どんな　ことが　あっ
ても　ふたを　あけないように　して　ください。」
と　いって、きれいな　はこを　わたしました。
うちへ　かえって　みる。
と、おどろきました。父も
母も　しんで　しまって、
うちも　なく　なって　い
て、村の　ようすも　すっ
かり　かわって　います。
知って　いる　ものは、ひ

とりも　ありません。かなしくて　たまりませんから、
玉手ばこを　あけました。
すると、はこの　中から　白い　けむりが　ぱっと
でて、うらしまたろうは、たちまち　しらがの　おじい
さんに　なって　しまいました。

（二）はごろも

むかし　ひとりの　りょうしが、
「きょうは　まあ、なんと　いう　いい　お天気だろう。」
と　いいながら、みほの　まつ原を　通りました。日は

よく てって いて、ふじの
山は、いつもより なお き
れいに みえました。
風は しずかで、波も 音
を たてません。おきの 方
は かすんで、空と 水が、
一つに なって みえます。
あまり けしきが よいの
で、りょうしが ぼんやりと





海を ながめて いました。
どこからか いい においが して きますので、み
あげると、まつの 木に うつくしい ものが かかっ
て いました。
そばへ よって みると、みた こども ない きれ
いな きものでした。
「これは いい ものが ある。ひろって、家の たか
らものに しよう。」
と いって、もって かえろうと しますと、みた こ
ども ない、うつくしい 女が きました。

「それは、わたくしの　きもの
で　ございます。」
「いや、これは　わたくしが、
いま、ここで　ひろったので
す。もって　かえって　家の
たからに　します。」
「いや、それは　天人の　はご
ろもと　いう　もので、人げ
んには　ようの　ない　もの
で　ございます。」

「天人の　はごろもなら、なおさら　おかえし　する
ことは　できません。国の　たからに　いたします。」
りょうしは、どうしても　かえしませんでした。
天人は　しおしおと　して、なみだに　うるむ　目で
空を　みあげました。

りょうしは、気のどくに　なりました。
「あまり　おかわいそうですから、おかえし　もうしま
す。その　かわり、天人の　まいと　いう　ものを
みせて　ください。」

「おかげで　天へ　かえる　ことが　できます。お礼に　まいを　まいましょう。その　はごろもを　おかえし　ください。」

「いやいや、おかえし　したら、まわずに　空へ　おあがりに　なりましょう。」

「いいえ、天人は　うそを　もうしません。」

「ああ、はずかしい　ことを　もうしました。」

りょうしが　はごろもを　かえしますと、天人は、そ

れを　きて　まいはじめました。

はごろもの　そでは　かるく　風に　まい、はごろもの　すそは　日の　光に　かがやきました。

りょうしが　みとれて　いますと、天人は　まいながら、まつ原の　上を　だんだん　高く　あがって、ふじの山よりも　高い　大空の　かすみの　中へ　はいって　いきました。

## 十二　ししの　なさけ

大むかしの　こと、ローマ"と　いう　国に、アンドロク"レスと　いう　人が　おりま"した。

ある　おやしきで、はたら"いて　いましたが、あまり主人が　ひどいので　がまん"

しきれなく　なって、とうとう　にげだしました。

町の　中に　いたのでは、人"目に　ついて　わかって　しま"いますので、人の　ひとりも　いない　ところへ　にげ"ようと、いっしょうけんめいに、さばくへ　むかって　走りました。

さばくと　いうのは、ひろい　ひろい　すな原で、家"は　一けんも　たって　いない　ところです。どちらを　むいても　すなばかり、人の　すがたは　どこにも　み"

えません。

「ああ、ああ、さびしいなあ。おなかが へって きた。けれど、たべる ものは ないし、こまったなあ。」

アンドロクレスは ひとりごとを いいながら、うろ。ついて いました。

いつの まにか、ゆうがたに なりました。どこかねる ところは ないかと さがして いる うちに、大きな ほらあなが みつかりました。

「ちょうど いい。ここなら だれも いないから ゆっ。くり やすめる。」



と いって はいりました。

うつら うつら ね。むりかけて いると、あたたかい、いきが かかったので、はっ。と、目が さめました。

あたまの 上から、大きな ししが のぞき。こんで いるのです。おど。

ろいた こと、おどろいた こと、アンドロクレスは、とびおきて しまいました。

「もう だめだ。ししの えじきに なるのだ。」

と 思うと、こわくて こわくて、からだが うごきません。

けれども、ふしぎな ことには、ししは ちっとも あばれません。

なんだか かなしそうに、元気の ない かおを して、アンドロクレスの そばに きて、まえ足を あげて みせました。

「どう したのだろう。」

と、こわいのも わすれて、よく みると、ししの 足には 大きな とげが ささって いました。

「やあ、これは かわいそうだ。いたいだろう。」

こう いって、アンドロクレスは 思わず その 足を ひざの 上に のせて、とげを ぬ

いて　やり、自分の　きものの　はしを　さいて、ほう
たいを　かけて　やりました。
それから　五日ばかり　たつと、ししの　きずは　すっ
かり　なおりました。
その　のち、ししと　アンドロクレスは、きょうだい
のように　なかよく　なりました。
しばらく　いっしょに　くらして　おりましたが、ア
ンドロクレスは　人げんですから、その　うちに、人の
かおが　みたくて　たまらなく　なりました。
「ししさんや、さようなら。いままで　わたくしに　た



べものを　さがして　くれて　ありがとう。」
と、友だちに　なった　ししに　わかれの　あいさつを　して、さばくを　でていきました。町に　つくと、すぐ、まえの　主人に　つかまって　しまいました。
主人は　たいへん　おこって、にげた　ばつに

アンドロクレスを　ししの　おりの　中へ　なげこむことに　しました。

その　日は、

「ししと　人の　すもうだ。」

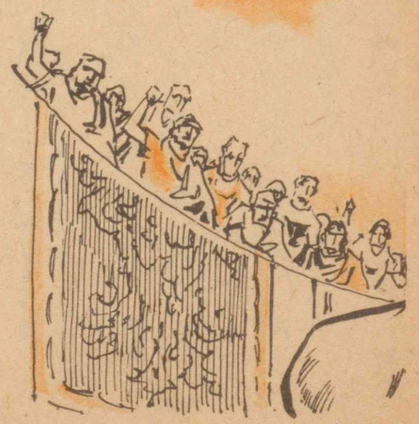
と　いうので、山のような　けんぶつ人が　あつまりました。

いよいよ　時かんに　なって、アンドロクレスは、おりの　中へ　なげこまれました。

ししは、白い　大きな　きばを　むいて、いまにも　とびかかろうと　しました。が、アンドロクレスを　みると、きゅうに　やさしそうに　した　を　たれ、いかにも　なつかしくて　たまらないと　いうように、そばへ　すりよって、ぺろぺろと　アンドロクレスの　手を　なめました。

みて いた 人たちは、みん
な おどろいて しまいました。
わけを きいて みる
と、この ししは、まえ
に、アンドロクレスに
たすけて もらった し
しだったのです。
けんぶつ人は、みんな
かんしんして しまいま
した。

そして ロマに、
「アンドロクレスを ゆ
るせ。」
「アンドロクレスを ゆるせ。」
と さけびました。
主人は、アンドロクレスを ゆるして やりました。
それから のち、アンドロクレスは、この ししと
森の 中へ かえって、たのしく くらしました。



# おけいこの　手びき

**二**　ぼくの　日記

1、この　お友だちは、まい日、どんな　ことを　して　いますか。しらべましょう。

2、日記を　書いて、ばっぴょうして　ください。

**三**　でんしゃごっこ

1、どんなに　して　あそびましたか。おはなしが　できますか。

2、いろいろな　のりものあそびを、みんなで　しましょう。

**四**　うちの　畑

1、この　作文の、どこに　かんしんしましたか。

2、うちの　畑や、きんじょの　畑、その　ほか　お手つだい　した　ことを　だいに　して、作文を　して　ください。

**五**　赤ずきん

1、この　おはなしを　読んで、思った　ことを　文に　して　ごらんなさい。

2、紙しばいを　つくって　みましょう。

**六**　おつかい

1、お友だちの　書いた　みじかい　文です。どんな　ところを　書いて　いますか。

2、いろいろな　ことを、みじかい　文に　書いて　みましょう。

**七**　ラジオごっこ



1、ラジオごっこで、なにと　なにを　はっぴょうしましたか。

2、ラジオごっこを　いろいろ　考えて、やって　みましょう。

**八**　雪うさぎ

1、この　げきの、どこが　おもしろいと　思いますか。

2、やくを　きめて、かわるがわる　やって　みましょう。

**九**　へやの　中で

1、へやの　中で　した　ことばあそびです。いろいろな　ことばあそびを　考えて　して　みましょう。

2、つぎの　文には、いくつの　まちがいが　ありますか。

ぢゃんけんで、まけた　人が　おやになります。

**十**　たろうさんへ

病気の　友だち、わかれた　友だち、その　ほか、しって　いる　人に、お手紙を　だしましょう。

**十一**　むかし話

1、この　お話を　紙しばいに　つくって　みましょう。

2、この　ほかの　むかし話を、しらべて　みましょう。

**十二**　ししの　なさけ

がいこくの　お話で、しって　いる　ものが　あったら、はっぴょうして　ください。

# あたらしく　でた　おもな　ことば

| | | |
|---|---|---|
| あいさつ | 36 | |
| あさい | 85 | |
| あたらしく | 22 | |
| あつめる | 44 | |
| あばれ（ません） | 124 | |
| あぶら | 39 | |
| いたい | 125 | |
| いっしょうけんめいに | 121 | |
| うすい | 8 | |
| うつくしい | 40 | |
| うろつい（て） | 122 | |
| えき | 17 | |
| おおい | 19 | |
| おくり（ます） | 102 | |
| おくれ（て） | 19 | |
| おこっ（て） | 29 | |
| おしい | 111 | |
| おそろしく | 47 | |
| おどっ（て） | 40 | |
| おとなしく | 35 | |
| おばさん | 68 | |
| おもしろがっ（て） | 110 | |
| おわっ（た） | 11 | |
| かいしゃ | 30 | |
| かえし（ません） | 117 | |
| かし（て） | 75 | |
| かすん（で） | 114 | |
| かず | 68 | |
| かなしく（て） | 113 | |
| かぶっ（て） | 28 | |
| かわいらしい | 33 | |
| ききて | 63 | |
| きけん（です） | 19 | |
| 気分 | 103 | |
| きめ（ました） | 17 | |
| きょうだい | 126 | |
| くし | 91 | |
| 国 | 117 | |
| こづつみ | 12 | |
| ころん（で） | 10 | |
| こわし（ます） | 35 | |
| さげ（た） | 19 | |
| さけび（ました） | 50 | |
| さっそく | 13 | |
| さます | 51 | |
| さわる | 27 | |
| ざんねん | 10 | |
| しずん（で） | 15 | |
| 知って | 7 | |
| じゅうぶん | 41 | |
| すい（て） | 24 | |
| 炭 | 76 | |



| | | |
|---|---|---|
| そうだん | 71 | |
| そろえ（て） | 20 | |
| たいよう | 40 | |
| たし（て） | 76 | |
| たすかる | 49 | |
| たずねる | 68 | |
| ただしく | 90 | |
| たちまち | 113 | |
| たのしみに | 105 | |
| 父 | 112 | |
| ちりとり | 18 | |
| ちゅうい | 19 | |
| つくえ | 11 | |
| てんき | 70 | |
| 戸 | 42 | |
| とうばん | 18 | |
| とけ（て） | 81 | |
| どどき（ました） | 12 | |
| となり | 89 | |
| とりかえ（て） | 52 | |
| とれる | 30 | |
| なおっ（て） | 104 | |
| なつかしく | 129 | |
| にあっ（て） | 34 | |
| にいさん | 55 | |
| 日記 | 8 | |
| ねつ | 80 | |
| ねどこ | 43 | |
| はこび（ます） | 56 | |
| はずかしい | 118 | |
| はたらい（て） | 120 | |
| 母 | 112 | |
| はまべ | 68 | |
| 早おき | 111 | |
| はれ（て） | 8 | |
| ばん組 | 63 | |
| 半分 | 106 | |
| 火 | 61 | |
| ひくく | 66 | |
| ひどく | 48 | |
| びょうき | 37 | |
| ひろっ（て） | 37 | |
| ふしぎな | 115 | |
| ふだん | 107 | |
| ふろしき | 89 | |
| へら（ない） | 66 | |
| 返事 | 45 | |
| ほめ（て） | 9 | |
| ま上 | 5 | |
| まけ（た） | 89 | |
| まじめな | 69 | |
| まちがい | 95 | |
| まっすぐに | 42 | |
| むかっ（て） | 25 | |
| むずかしい | 85 | |
| むりに | 78 | |
| もえ（て） | 60 | |
| やぶれ（た） | 28 | |
| やめ（て） | 50 | |
| ゆうがた | 60 | |
| ゆるし（て） | 131 | |
| よけい | 37 | |
| よわっ（て） | 37 | |
| れんしゅう | 6 | |

記 (8)　意 (16)　外 (35)　波 (55)　左 (85)　主 (120)

金 (8)　通 (17)　村 (36)　入 (57)　糸 (92)　町 (121)

組 (10)　名 (17)　森 (36)　玉 (58)　半 (106)　自 (126)

百 (10)　畑 (26)　知 (37)　両 (66)　毎 (110)

東 (12)　時 (31)　分 (38)　汽 (69)　父 (112)

京 (12)　家 (32)　鳥 (40)　炭 (76)　母 (112)

礼 (13)　女 (33)　返 (45)　病 (80)　原 (113)

用 (16)　元 (34)　事 (45)　右 (85)　国 (117)





編修委員

日本女子大学付属豐明小学校主事　西原慶一
東京学芸大学竹早付属小学校教諭　泉節二
同　山下正雄
成蹊中学校教諭　飛田多喜雄
日本女子大学付属豐明小学校教諭　小山玄夫
作家　斎田喬

さし絵・表紙

井口文秀　川上四郎　川島はるよ
鈴木栄二郎　土村正寿　野水昌子
林義雄　伏石繁男　耳野卯三郎
山上喜司　竹原聖千

こくごの本四（小学校第二学年後期用）

昭和二十六年九月一日印刷
昭和二十六年九月五日発行
（昭和二十五年八月十二日文部省検定済）

定価七十一円

著作者　代表者　西原慶一

発行者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔

印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社　代表者　大野治輔

発行所　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地　二葉株式会社

小国214　12　二葉

なまえ

広島大学図書
2000089458

二葉株式会社